

1948(昭和 23) 年～

1. 経歴・狭山市とのかかわり

中学、高校では美術部に所属し油絵を描いていたが、大学時代、気分転換で始めた陶芸の魅力に徐々にはまっていった。27歳で日戸光雄氏に師事し、陶芸の道に進む。生まれ育ちは所沢市だが、父親が北入曾出身という縁から43年前に狭山市に移り住み、1978年「陶房人間野」を開設する。以来、創作活動を続ける傍ら、週の半分は陶芸教室を開き生徒の指導を行っている。また、市内の公民館や福祉施設などで陶芸を教え、市民に陶芸の楽しさを伝えている。以前は銀座や青山で個展をよく開いていたが、近年は市内の画廊で2年に1回のペースで個展を行っている。



陶房人間野にて

2. 主な業績

① 数々の受賞歴

36歳の時、埼玉県展知事賞を受賞し、自分のやってきたことは間違いないという大きな自信になった。その後も日本伝統工芸展、日本陶芸展、益子陶芸展など、全国レベルの展覧会での受賞が続いている。1990年より埼玉県展の審査員も務めている。2000年には、人間国宝を中心に伝統工芸作家・技術者等で組織する団体、公益社団法人日本工芸会の正会員に認定された。

② 狭山市駅西口市民広場の「思い出タイル」制作

西口再開発工事現場から採取した土(3割5分程度)と信楽の土を混ぜて5000枚のタイルを素焼きし、子ども達を中心に好きな絵柄や手形をつけた後、それらを本焼きして「思い出タイル」を仕上げた。2010年に完成したこのプロジェクトには3年の歳月を要した。

3. 特筆 ～①陶芸の魅力 ②大切にしていること～ (2018.10.18 陶房でのインタビューより)

① 納得のいく作品を作るにはどの工程も一つ一つきちんと行うことが大切だが、中でも一番神経を使うのは本焼きである。大窯で18時間かかり、体力も必要な大変な作業である。しかし、自分が思った通りの作品が完成した時の喜びは格別で、好きなことをやる幸せを感じる。



② 陶芸には何の縛りもないと考え、マンネリ化を避けて常に新しいデザイン、技法を生み出そうと努めている。学生時代の絵の経験はデザインの現代性に生きていると感じている。また、作品に合わせて混合した土を工夫して使っている。

休みはなく、毎日9時には仕事場に入り、1日のスケジュールを決める。1人で行う仕事なので、自分で予定を立て自律的に行動することを大切にしている。「これからもその都度浮かんだアイデアを大切にしながら作品を作り続けたい。5年先のことを考えるのではなく、今日と明日のことを考え、着実にやっていく。そのことの繰り返しである」